

水辺の憩の場へ

あかがた
うらがた
~赤浦潟~

赤浦潟

周囲約4.4km、面積約0.29km²、市内最大の淡水湖「赤浦潟」。この潟湖は、「ワカサギ」や「コイ」、「フナ」など、淡水魚の釣り場として知られている。

赤浦入江と赤浦遺跡

現在の赤浦潟は、淡水湖になっているが、かつては入海であったといわれている。赤浦潟周辺にあった台地には、縄文時代に約一千年もの長い期間続いたといわれる集落があった。この集落の跡（赤浦遺跡）は台地上にあり、約30,000m²の広がりをもっていた。周囲の山と入海からもたらされる豊富な食料などによって縄文遺跡としては能登最大級のムラが営まれていた（現在は消滅）。

赤浦遺跡から発見された貝塚からは、縄文式土器とともに獣や魚の骨片、アサリやカキ、サザエやアカニシ（七尾での呼び名で、標準和名はコナガニシ。標準和名でのアカニシは別種）などの鹹水性（塩水を好む性質）の貝殻が多く見つかっている。また、縄文中期には海面の上昇や下降などの環境の変化が起こり、潟湖から入江となり再び潟湖になったと推察される。

その後、昭和50年に設置された防

潮水門によって淡水化されるまで、海水と淡水が混じる汽水湖になっていた。

漁村赤浦

この汽水湖期に、古くは石崎村の漁師たちが、前田利家から赤浦潟の小魚を捕ることを許可され、それを餌に手釣りや延縄漁をおこなっていた。

赤浦でも漁業が行なわれていたが、加賀藩政期に行なわれた潟の埋立・新開事業により、しだいに農業が中心となっていった。そのためであろうか、潟の漁協では、石崎の漁師に舟での漁獲を依頼していたこともあった。

昭和初期にはカキガイの養殖も行なわれ、ボラ、ウグイ、クロダイなどの淡・鹹両水域に生息できる魚介類が多く産する、水産物の宝庫であった。

景勝地赤浦潟

また、景勝地としても知られ、現在でも、赤浦川にかかる、松百新橋からは、潟周辺がオレンジ色の光に包まれた美しい光景を目にすることがある。

昭和3年に刊行された『鹿島郡誌』には、赤浦潟を名跡として紹介しており、「松百橋（河口の水門あたりにあったといわれる橋）」からの情

景、特に夕映えの美しさは言い表すことができないほどと記されている。江戸時代の『能登八景』に選ばれていた「松百」（元禄12年（1669年）、俳書「能登釜」）や「松百夕照」（寛政2年（1790年））に選定）は、「松百橋」から観た赤浦潟の情景のことであろうか。また、昭和17年に能州文化振興会によって『新七尾八景』を公募した際には、「赤浦潟」が選ばれ、他の七景とともに版画が作成されている。



写真 赤浦町 宮野茂氏提供 神輿の湖上渡御



能州文化振興会 版画「能登新七尾八景」より

このころには、祭りで赤浦潟を渡御していた。夕暮れ時に潟を進む船